

## 日本におけるYWCA 運動受容の背景に関する考察

著者	中本 かほる
著者別名	NAKAMOTO Kahoru
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	53
ページ	375-393
発行年	2016
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00008795/">http://id.nii.ac.jp/1060/00008795/</a>

## 日本におけるYWCA運動受容の背景に関する考察

文学研究科教育学専攻博士後期課程3年

中本 かほる

### はじめに

日本に西洋キリスト教社会で誕生したYWCA (Young Women's Christian Association : キリスト教女子青年会) が設立されたのは、1905年10月14日であった。日露講和条約をもって日露戦争が終結した年である。ここから日本のYWCA運動は始まったが、そもそもYWCA運動はどのような経緯を持って誕生したのだろうか。1947年発行の『世界キリスト教女子青年会の歴史』<sup>1</sup>においてアンナ・ライス (Anna Virena Rice:1880-不明) は、19世紀後半、英米で顕れた一連のキリスト教リバイバル (信仰復興) 運動がYWCA の誕生を促したと記している<sup>2</sup>。ここでいうキリスト教リバイバルとは、宗教心や信仰が再び燃え上がる現象を指し、宗教と信仰に再び立ちかえらせることを目的とした、大衆伝道の形態をとった伝道活動である。また、武田清子は日本YWCA形成の背景として、リバイバル運動の中で主張された「世界にキリスト教を宣べ伝えよう」とのプロテスタント諸教会の福音宣教活動、すなわちミッシヨナリームーブメントがあったとする<sup>3</sup>。二人が述べるように、YWCA誕生を促した一連のキリスト教リバイバル運動は、福音派<sup>4</sup>的な日常生活での神への献身と言う生活と実践を特徴とし、直接的・間接的に社会改良や改革運動<sup>5</sup>を更に飛躍させると共に、運動を支え働き手であった女性たちの意識と行動を社会へと向かわせ、女性の社会的位置付けの変革を促していくこととなったとみられている。

このような社会の動きの中で、プロテスタント諸教会の女性たちは諸地域への宣教師派遣という福音宣教の拡張を支えた。そのボランティアな活動は彼女たち自身によって組織され、行動する女性を支える婦人伝道局 (Woman's Foreign Missionary Society<sup>6</sup>) を成立させた。こうした婦人宣教師派遣の実情について、小檜山ルイは、「有閑既婚女性の無償の奉仕と、海外における独身職業婦人の有償の労働とを両輪として」19世紀後半女性による海外伝道が強力に推進されたと記している<sup>7</sup>。

拡張するプロテスタントの動きは、20世紀に入ると統合へと動き始め、教会再一致を目指す超教派的なエキュメニカル運動<sup>8</sup>を創出した。この運動の中で、青年男女の奉仕活動と彼等へのキリスト教教育として、超教派的なYMCA (Young Men's Christian Association :

キリスト教青年会)、YWCA、WSCF (World Student Christian Federation : 世界キリスト教学生連盟) が設立されていった。

こうしたYWCA設立経緯の理解、解明には、プロテスタント諸教会の近現代史の研究からの学びを必要とするが、本論文では、キリスト教通史理解に留まらず、その中に存在し、活動した女性たちの姿の一端を、先行研究に依拠しながら明らかにしたい。次に、欧米キリスト教世界から伝えられたYWCA運動を、日本の女性たちが受容できた背景として、婦人宣教師の存在が大きかったと捉え、彼女たちが果たした役割について考察する。日本の近代化が一部の女性の教育の可能性を開き、来日した婦人宣教師たちによる女子教育の充実が図られ、限られた範囲ながらそうした教育を通して少女や女子青年の社会的な基礎力が養われていったと考えられるからである。欧米女性たちが培ってきた「無償の奉仕と有償の労働」という運動組織の新しい形態が、婦人宣教師たちによるどのような実践を通して受け入れられ、日本のYWCA運動を支える基となっていったかを追究したい。

## 1. 19世紀リバイバル運動・エキュメニカル運動とYWCAの成立

YWCA設立の基礎として、ライスと武田は「19世紀後半のリバイバル運動」、「プロテスタント諸教会の福音宣教活動」、「ミッショナリームーブメント」を挙げているが、こうした運動に女性たちはどのように関わっていたのかをみていくことにする。

一般にリバイバル運動は、以下のように規定されている。

近代キリスト教（主にプロテスタント）において、情緒的高揚を引き起こすような集会を開いたり、メディアを用いるなどしたりして、多くの人々が一体感を持ちながら、それを支えとして強い信仰覚醒を起こすことを目指す運動。信仰復興運動とも言う。18世紀のアメリカ、イギリスに始まり、20世紀には世界各地に広まり、とりわけ近代化の途上にある地域で大きい成功を収めて今日に至っている<sup>9</sup>

18世紀から20世紀にかけて英米で発生したリバイバルの影響は、キリスト教国にとどまらず、日本をはじめとする近代化の途上にある国にも影響を及ぼしたことが記されている。例えば、外村は次のように述べる。

日本では1883年横浜で開かれた祈りの集会が数週間続いた後リバイバル化し、東京、京阪神にもおよびキリスト教会は活気づき、翌年には同志社大学（京都）でリバイバルが起こり、200人の学生が入信したという。こうした動きは当時、全国に波及した<sup>10</sup>。

本節では先行研究に依拠し、YWCA誕生の背景となるリバイバル運動の特徴を見てみる。

18世紀中ごろから20世紀初めに至る期間、繰り返し発生した信仰復興運動は大覚醒と呼ばれ、英米の社会や政治にも大きな影響を与え、住民の宗教的自覚を高め、教会の教義や制度に変革をもたらす動きであったと言われている。歴史学者フスト・ゴンサレス（Justo L Gonzalez：1937-）は、18世紀の終わりにニュー・イングランドで始まった第二次大覚醒について、この期の特徴を著しい感情的表現よりも、突然、人々が信仰生活に熱心になる事にあった、また似たような他の運動が特徴としていた反知性的な色合いがなかったと記し、運動の始めから、「福音を広めることを目的とした協会がいくつも設立された」と述べている<sup>11</sup>。具体的には以下の協会がその例として示されている。

① 「福音を広めることを目的とした協会」

アメリカ聖書協会(1816年)、アメリカ外国宣教理事会:通称「アメリカンボード」(1810年)の例を示し、こうした宣教活動に対し個々の教会では「女性宣教会」が組織され、その一部は後にいろいろな女性組織に発展した。

② 「社会問題と取り組むための協会」

アメリカ植民協会（奴隷を買い取り、解放してアフリカに送り返す目的で1817年設立）、アメリカ禁酒推進協会（1826年）を示し、禁酒推進の運動は女性が中心となり、19世紀後半に女性キリスト者禁酒連盟は、女性の権利を擁護する最大の団体になった。

小檜山は、18世紀末から19世紀初頭の第二次大覚醒による宗教的高揚は、19世紀幕開け間もなくしてアメリカが海外伝道に乗り出す気運を準備したと記し、その要因を、「疑いなく、教会の女性たちが海外伝道に対して特に深い関心を示したことであった」と分析している<sup>12</sup>。二人の記述では、19世紀前半のリバイバルによって、福音宣教や、社会問題への取り組みがなされ、実施する組織として各種の協会が設立された。そこでは女性たちの働きがあり、このことが後に各種の女性団体の形成につながったという解釈が共通している。一方、イギリスにおいてもこうした動きは起こっていた。

アメリカの教会歴史家ウィリントン・ウォーカー（Williston Walker：1860-1922）はその著書<sup>13</sup>において、人道主義の新しい精神の覚醒を示すものとして、「牢獄改革の父」と呼ばれたジョン・ハワード（John Howard：1726-1790）のイギリス議会での告発（1774年）や、国教会内の福音派の裕福な人々による奴隷制度撤廃（1833年）の運動について記している。また福音宣教については、諸教派協力の「宗教文書協会」(1799年)や福音派による「英国及び海外聖書協会」(1804年)の設立を挙げ、キリスト教文書の流布に努め広範な聖書普及を可能としたことが記されている。また貧しく教育を受けられない人々へキリスト教的訓練の場として福音派の国教会信徒による日曜学校（1780年）の創立が非国教会にも波及し「英国領全体に日曜学校を普及する協会」(1785年)が組織されたことを示している。彼はこの期のリバイバル運動で最も重要なこととして、近代におけるプロテスタント海外伝道の勃興を挙げている。イギリスでは、1649年の国会法令により最初の海外伝道組織「ニュー・イングラ

ンド福音宣教会」の設立後、いくつかの海外伝道組織が設立され、1795年超教派の「ロンドン宣教協会 (London Missionary Society)」が創立、19世紀になると、アメリカやヨーロッパ大陸においても教派また超教派による宣教協会が大規模に組織されるようになったと記している<sup>14</sup>。

このような時代を、「19世紀はキリスト教の地理的拡張の時代」だとゴンサレスは表現している。19世紀前半の福音宣教や人道的な社会問題への取り組みという特徴は、19世紀後半期に継承され、プロテスタント各教派の発生と分派を生じながら、社会を変える取り組みと共に、福音宣教の推進という活動は広がっていった。こうした多義多様な教会各派の拡張は、19世紀後半になると、主要な教派の説教的な協力的活動や超教派的連盟に始まり、20世紀に入って国際的宣教会議から継続委員会の組織となり、第1次世界大戦以後世界的な計画が進捗されたが、第2次世界大戦後、世界教会協議会 (WCC=World Council of Churches) の組織を達成するに至る教会一致の方向が推進されたとキリスト教史学者の石原謙 (1882-1976) は述べている<sup>15</sup>。

このような教会再一致を目指す運動は「エキュメニカル運動」と呼ばれた。ウォーカーは、「エキュメニカル運動」を取り上げ、その中で19世紀の教会一致を目指すプロテスタントの生活と思想の6つの領域 (①伝道活動分野、②青年の間での働きとキリスト教教育分野、③キリスト教的奉仕と共同の倫理的行動のための組織の形成分野、④教義分野、⑤有機的教会合同分野、⑥世界的規模の教派内の一致と交わりの強化分野) を示している。第2領域の「青年の間での働きとキリスト教教育分野」については、以下の記述がなされている。

第2の分野は青年の間での働きとキリスト教教育のそれであった。前者で高度にエキュメニカルな先駆的役割を果たしたのは、1844年にジョージ・ウィリアムズ (George Williams : 1821-1905) がロンドンで創設し、その後全世界に広まった非教派的なYMCAの運動である。世界YMCA連盟は1855年に設立されたが、同じ年にはロンドンでYWCAも始められ、1894年には世界YWCAが発足した。青年の間での働きでもう一つ重要なのは (略) 外国伝道のための学生ボランティア運動であった。(略) 1895年世界学生キリスト者連盟 (WSCF) が発足した。(略) 世界的な学生の交わりは圧倒的に信徒運動であったが、世界キリスト教教育運動も信徒運動的性格を強く持っていた<sup>16</sup>。

石原もYMCA、YWCA、WSCFを挙げこれらの運動は、世界各国のキリスト教青年を宗教的社会的事業を通して接近させ相互協力の機会を作ったのみでなく、競合対立しがちな教派間の関係を緩和し教会一致への道を準備し、教会的合同への気運を促進したと評価をしている<sup>17</sup>。キリスト教会の歴史は拡張と統合により彩られていると言われ、「19世紀には、ことにプロテスタント世界においては拡張が支配的であったが、20世紀に入ると統合への動き

がより鮮明となった」<sup>18</sup>と言われた。YWCAの登場はそうした歴史の中に位置付けられている。リバイバルに影響を受けた女性たちは、「福音派的な日常生活での神への献身」を、都会に出てきた若い女性へのホステル（宿舎）事業として具体化した。また、ホステルにおいては彼女らに向け文化的・社会的事業や宗教教育事業を展開し、若い女性の経験や視野を広げ、彼女らの自律的生活の基盤を培おうとした。YWCAは拡張の時代に発足、統合の時代に、女子青年の分野でその役割を果たすべく世界組織としての活動を形成させていた。19世紀後半キリスト教リバイバルを背景として創立されたYWCAは、世界の都市に広がり、女性たちによる女子青年のための事業を通し、直接的・間接的に社会改良や改革を自らの問題とする女性を育成し、その層を広げたのである。

## 2. 英米女性たちの奉仕活動とYWCA

次にリバイバルの中で運動を支え推進した女性たちの姿に焦点を当ててみたい。19世紀イギリスのヴィクトリア朝社会は、社会階級と性差による二重の区別が前提となる時代であったとされる。こうした社会環境の中で、中流階級の女性たちに求められたのは「淑女（レディ）」、労働者階級の女性たち求められたのは「善良な女」であったと言われている。イギリス近代女性史では、ミドルクラス層の広がりを基礎に「男女の領域分離」、そこからくる「家庭の天使」、裕福な層の女性が、資本主義的家父長制の下で「家庭道徳」を逸脱しない範囲で許された唯一の「公的」な活動がチャリティだったと言われている。

金澤周作はイギリス近現代女性史研究<sup>19</sup>の中で、「チャリティと女性—レディの天職」において、1830～40年代頃からイギリスの女性たちはチャリティの領域へさかんに関与し、「チャリティはレディの天職だ」<sup>20</sup>という認識が定着したと述べ、その誕生のプロセスを以下のように記している。

イギリスでの産業革命の進行（1780年代～1830年代）は、新たな支配層として都市の産業ブルジュアジー（ミドルクラス）を誕生させた。彼らは、個人のモラルを厳しく問う福音主義の宗教思潮を支持し、貴族的大地主の頹廃や、都市貧困労働大衆の怠惰を批判するようになった。福音主義は、家父長として外界に立ち向かい、公的活動に従事する「男」、敬虔で愛に満ちた温かな場所を主人のためにしつらえる「女」という、男女領域の公私分離の固定的な家庭道徳観を持っていた。こうした家庭道徳観は、1840年代までには形成されていたと金澤は述べている。また、家庭道徳を逸脱しない範囲で女性に許される唯一の「公的」な活動それがチャリティであったとも述べている。

次に金澤は、サマーズらの代表的な見解（Summers,1979）を引き、支持している。新しく生まれた富者と貧者の関係性は構築されておらず、社会は不安定であった。家庭道徳にもとづいてチャリティに携わるミドルクラスの女性には、「チャリティはレディの天職だ」と言わしめる公的な役割が与えられ、女性特有の相手を和らげる力は、貧者の心を開き提供さ

れる支援も歓迎されるはずだ、上品で慈しみ深い態度は、救済対象の貧困家庭に良い道徳的影響を及ぼし、上の階級への敬意と模倣欲求を涵養すると考えられた。余暇を利用した女性の自発的な無給の奉仕は、階級を超えたいわば対等な友情関係をつくる。社会を一つの家族、富者を親、労働貧民を子あるいは使用人と考えるならば、その家庭の平和を達成できるのは、個々の家庭を切り盛りする模範的な女性（レディ）をおいてほかにないと、サマーズはその実態を解き明かしている。こうして「レディの天職」としてのチャリティが認識定着したことを示し、「チャリティは有閑女性の偽善的で自己満足的な暇つぶしでは決してない意味を持っていた」と金澤は論を結んでいる。また、ミドルクラスの女性たちによる19世紀のチャリティ実践の重要な部分は訪問活動と募金活動であったとし、具体的には、2,000人のボランティアが4万世帯を月2回訪問（1853年断片的データ 会衆派クリスチャン教導協会）、教会での献金の呼びかけ、寄付者への訪問と集金、資金集めの晩餐会や音楽会の実施、バザー等の例を金澤は示している。

次に、第2次大覚醒とも呼ばれた時代のアメリカ女性についての研究を紐解いてみる。

エレン・キャロル・デュボイス（Ellen Carol DuBois）とリン・デュメニル（Lynn Dumenil）はその著書<sup>21</sup>で、19世紀のアメリカ女性像は、「真の女性らしさ（true womanhood）」「男女の領域分離」「家庭性」といったジェンダーイデオロギーで捉えられるとしている。また女性の家庭性と存在そのものの中心は母性であるとし、母性は他者のために完全に滅私奉公的に行動することを期待され、女性の自己犠牲的な母性は国の安寧の源と見なされ、新国家の市民が有徳で、社会のために勤勉で、自己規制のきく人間を育てる事が期待されていたと記している<sup>22</sup>。

また、女性の母性的な天職は深いところで宗教とかがわっていたとされる。真の女性らしさは熱狂的なプロテスタント信仰と結びつき、そのことが女性的な献身と私利私欲のない犠牲とに救いの力を与えていた。真の女性は日々の生活の中でキリストの代理としての機能が与えられており、女性が支配する家庭環境はある種の聖なる領域となり、悪魔や世俗的な影響を浄化すると考えられ、18世紀末から19世紀初めにかけてのアメリカ社会を席卷した新しい信仰復興運動と深く結び付いていたと述べている。信仰復興運動は、南部においても拡大した。猛烈な勢いで宗教に回帰しようとするこの文化現象は、革命期に政治に夢中になりすぎたこととアメリカの経済体制の変革があまりに早すぎたことに対する反発とによるものであるとも述べられている<sup>23</sup>。

19世紀アメリカにおいてもイギリスと同様に、女性には家庭内の「領域」が任され、滅私奉公的な行動が期待される母性が求められていた。その家庭の理想像は「クリスチャンホーム」でその中心は女性であり、女性的な献身と私利私欲のない犠牲をもって、キリストの代理として家庭内道徳を体現する者であった。家庭内「領域」に閉じ込められた女性が家庭の外で活躍できる場所は教会であり、教会出席者の多くは女性で、教会は女性の活躍が認めら

れた唯一の公的な場所であった。小檜山は南北戦争後、多くのアメリカの中流白人女性は、家事の合間をぬって実質的に家庭の外に出、大規模・全国的な婦人団体を形成し、主に家庭と言う私的空間の中で発揮されていた女性の「道徳的影響力」を、より強く社会的な形で行使し始めたと述べ、その一つの例としてアメリカにおける婦人伝道局の設立を挙げている<sup>24</sup>。女性たちは、宣教師の旅支度を整え、グループを作り、献金を大勢で行っていた。こうした活動が拡大発展したのが婦人伝道局と呼ばれるものであるとした。婦人伝道局の成立は、女性の海外伝道の参加を本格化させ、主な婦人伝道局のほとんどが南北戦争後、1860年代末から1870年代に設立されている。婦人伝道局は女性が集めた資金によって、異国の女性のために、婦人宣教師を派遣したが、特に独身婦人宣教師の派遣に目的意識を持ち、婦人宣教師の旅支度と旅費を整え、給料を支払い、婦人宣教師のプロジェクトが要する資金を準備し、婦人宣教師の選定をも専ら行っていたと記している<sup>25</sup>。

そもそもアメリカのプロテスタント海外伝道においての宣教師の派遣は、基本的に夫婦を一組として任地に送っていた。宣教師の妻の役目は、夫の世話、子供の養育、家庭内の家事雑事等クリスチャンホームの維持であり、余力があれば夫の伝道の手助け、現地人学校を開く、現地女性の家庭訪問等が求められるというものであった。婦人宣教師には異教徒の女性の地位をクリスチャンの女性が保持する地位にまで高めるという目的意識が与えられていたが、家庭維持の優先性は、それを困難にしていた。伝道の成功には女性への布教が重要であり、特にアジアでは女性の社会に男性は軽々に近付けない現実から、伝道に活力を注げる独身の女性が求められていた。言い換えれば「宣教師の妻の仕事の延長線上に」独身婦人宣教師の働きはあったと小檜山は述べている<sup>26</sup>。

19世紀リバイバルを背景として、イギリス・アメリカの女性に求められていたのは、キリスト教的価値観をベースとする母性であり、限られた領域の中での社会性であった。彼女らにとっての社会性は、社会の必要性という奉仕活動の中で培われた。それは困難を抱える人を訪ね世話をすることであり、それに必要となる資金をつくる事であった。女性たちは、献金を捧げ資金を生み出す取り組みを展開、その活動を支え助け、職業人としての女性を派遣し、その活動を保証するまでの社会的位置を確立した。

このチャリティや宣教師派遣への奉仕活動に邁進していく女性たちの姿には、ステレオタイプ的なジェンダーに押し込められた姿とはいささか異なって見える部分がある。奉仕活動の始まりとその背景には、女性に求められたジェンダー性を見るが、奉仕活動が動き出すことにより、彼女らの社会性は広がり、設定されたジェンダー領域を超える結果を生み出していた。時代により理想とされたジェンダー的女性像の中に女性は存在し、生き方の多くの部分はその理想像と自らを比較、他者からも比較されながらの日常であることは現在までも続く女性を覆う現象であるが、ボランティアな活動が持つ波及力は女性自身をまた社会を変容させうる力を持っていた。



こうした現象は19世紀のチャリティや婦人伝道局の奉仕活動に留まらず、現在におけるボランティア活動の中にも同様に存在している。チャリティや婦人伝道局の活動の中で見られ、現在も継続している事例がもう一つ存在している。宣教や社会事業を支えるために実施した女性たちの生活の中から生み出された奉仕の形である。「世話を焼く」という形での貧困者や宣教師たちへの手助けする姿や、献金を捧げ集める行動、バザー等による資金作りの方法等の奉仕活動の実際の方法や形態が、19世紀から現在に至るまで、ほとんど変わっていないという現象である。このミドルクラスの女性たちの奉仕活動の形態は、100年後のYWCAの中にも同様な奉仕の形態として存在している。

### 3. 日本におけるYWCA 成立期の女子教育

西洋キリスト教社会において形成された奉仕活動文化は、単に宗教的な行動として日本社会に位置付け継承されたのであろうか。日本のYWCAも教会や宣教団体に準ずる宗教組織であるが、その活動の中身を詳細に見てみると、日本の女子青年一般を対象とした活動を展開し、社会教育関係団体として長く位置付けられてきている。従って、キリスト教を磁場とする西洋社会でのありかたと、日本におけるそれとはやや異なるのではないか。社会教育的な活動の展開の中で、この奉仕活動文化はどのような方法で、また誰によって継承されたのだろうか。1905年に日本のYWCAは設立されたが、その時代の女子教育、キリスト教や婦人宣教師たちの状況を概観することから始める。

#### (1) 明治期の女子教育

明治維新後、政府は日本の近代国家としての成立を目指し、1871年教育行政の府として文部省を創設、翌年学校教育制度を示す学制を公布し、四民平等で女性をも対象とした近代的教育理念を示した。しかし急激な教育体制の改革は混乱を生み、学制実施に当たり文部省が重視した小学校の就学率は低いものであった。学制公布の後、「欧米流の知識技術に重点を置く実学主義的な、また主知主義的な傾向は、民衆の実生活そのものからは遊離し、明治政府の意図する文教政策からも逸脱するところがあるかのような観」<sup>27</sup>に対し、東洋道徳に基づく教育の基本思想の必要性が説かれ、「教学聖旨」(1879年)に基づく教学の根本方針即ち「知識才芸よりも先に仁義忠孝に基づくいわば儒教的な道徳教育」<sup>28</sup>を教学の要として文部省は教育令(1879年)・改正教育令(1880年)により教育制度全般の改革を実施し、教育政策の刷新を図った。この流れは国民道徳および国民教育の基本とされ、国家の精神的支柱として重大な役割を果たすこととなる教育勅語(1890年)発布へと進展することとなった。

こうした流れの中で女子教育は、教育令によって「女子ノ為ニハ裁縫等ノ科ヲ設クヘシ(第三条)」と教育内容の相違がつくられ、男子の高等、専門学校、大学に女子の入学を許可しない根本法となる「凡学校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルコトヲ得ス但小学校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルモ妨ケナシ(第四十二条)」において、男女7才にしてという封建的な男尊女卑

の思想を持つ国家の女子教育の根本原理が確立されていった<sup>29</sup>。

その一方では、「近世以来の私塾、寺子屋のような教育機関はたくさん存在し、また新しい時代に応じて生まれ続けたという事実」<sup>30</sup>があり、キリスト教系の学校成立史においても、宣教師の渡来を機に1870年（明治3年）頃より多くの教育機関が設立されたことが見えてくる<sup>31</sup>。東京都都史紀要9『東京の女子教育』（1966年）においては、東京の女子教育施設成立の経過を萌芽期（1870年～1879年）、委縮期（1880年～1884年）、開花期（1885年～1889年）とし、開花期に成立した女子教育施設の特徴を、①プロテスタント系のミッションスクールに専門コースが新設、②ミッションスクールに対し日本人がイニシアチブをとるクリスチャンスクールのスケールが大きくなったもの、③社会事業に集中していたカトリック系の団体が女子教育の開拓を始めたもの、④仏教関係が女子教育に着目、⑤一般の女子教育に極めてハイカラなものが成立した反面、実利を重視した裁縫、手芸を中心とした女学校が増加した、と分類している。

新たに設置された女子教育施設の多くは、尋常小学校卒業若しくは高等小学校卒業程度と言う入学資格で、英語や数学を始めとする教養教育や、裁縫編物等の実利的な教授を行う教育施設で、多くは女学校と名付けられていた。その教育内容は多様であったが、キリスト教を背景とした宗教教育等、主催者の意図する教育内容が実施されるなど、ある種の自由さがあったと言える。同書は「東京の女子教育が、もつとも活発になったのは、三十二年の高等女学校令の公布以後であった」とも述べている。高等女学校令以降の各府県公立高等女学校の設立等、女子教育が活発な動向を示した時期は同時に、1880年代から進められてきた国の教育政策の変更により、高等女学校令では家事・裁縫の必修と英語・欧米文化理解の時数限定という形で女子教育の内容を狭め、文部省訓令12号（1899年）では宗教教育の禁止により宗教的儀式、聖書に関する授業等の禁止等、キリスト教による欧米的な教育への抵抗を示し始めた時でもあった。

以上を概観すると、明治政府設立時の近代的教育制度の導入は、教育勅語に象徴される国家主義的な教育制度へと変遷を遂げ、女性への教育は封建的な男尊女卑の思想を根本に持つものであった。その一方、庶民の中の教育熱は高く、市井には各種の教育機関がつくられ、宣教師らによっても多くの学校が設立されていた。自由闊達に展開されていた教育活動ではあったが、20世紀に入り欧米的なキリスト教的人間観を持つ教育への抵抗が政府によって少しずつ示され始めていた。そうした時代に日本のYWCAは設立されたのである。

## (2) 明治期キリスト教と婦人宣教師

日本におけるキリスト教宣教は、1549年フランシスコ・ザビエルによって開始されたと言われている。以後、織豊政権から徳川政権へと続く約一世紀の間、日本での宣教活動は展開されたが、鎖国の完成のなかで発せられた禁教令によりその動きは終わった。近代における日本宣教の契機といわれる1837年モリソン号事件<sup>32</sup>後、1858年日米修好通商条約の締結に

よる居留地での外国人の信教の自由が認められた頃より、キリスト教各派の日本再布教が展開され始めた。アメリカのプロテスタント教会は、1859年宣教師たちの派遣に当り、①長崎と江戸に常駐させ日本青年に英語教育を実施、②宣教医を派遣し施療を行う、③宣教師は忍耐・温和・親切そして学問的傾向にある人々という特質を持つ人材をとの提案を在来中国の宣教師から受けていた。来日した初代プロテスタント宣教師たちは、東洋伝道経験者の医師ヘボン（James Curtis Hepburn：1815-1911）、中国伝道経験者の教育者ブラウン（Samuel Robbins Brown：1810-1880）、公用外国語のオランダ語が出来るフルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbeck：1830-1898）等であった。居留地内での外国人の信教の自由という枠の中での再布教の対象地域は、英語を学びたい青年が集まり、医療奉仕が評価される都市部であり、知識階層がそのターゲットであった<sup>33</sup>。

明治政府は不平等条約改正交渉を進める中で、1873年切支丹禁制の高札撤去を断行した。これを契機に欧米の諸教会からの宣教師の派遣が急増し、盛んな伝道が開始された。各地に伝道所が開かれ、日本における各教派の教会組織化が進んだこの時代、キリスト教の伝道者養成を目的とした学校や家塾的な小さな学校等のキリスト教主義学校が創立された。キリスト教伝道の基本的な目的は、神の言葉を伝え、現地の人々による教会をつくることであり、聖書の翻訳、現地人聖職者の養成即ち男子普通一般教育および神学教育等が主たる宣教事業としてあった。それらは聖職者としての男性宣教師の仕事であった。そうした中で現地の人々との接点を作る補助的事業を担ったのが女性宣教師である。女性は神学教育から排除され、按手札を受けた牧師となることは認められておらず、既婚の婦人宣教師は異国の地でのクリスチャンホームの維持、独身の婦人宣教師の場合は伝道の機会をつくる慈善・社会事業・教育事業・医療事業・家庭訪問等、「文明伝播的」事業に関わる「アシスタント・ミSSIONナリー」としての存在であった<sup>34</sup>。明治初期（1870年代80年代）来日したプロテスタント婦人宣教師の大半を占めたのはアメリカ系の婦人宣教師であった。先にも述べたように、伝道の成功には女性への布教が重要であり、特にアジアでは女性に向けての伝道に活力を注げる独身の女性が求められた。こうした状況に沿って来日した独身婦人宣教師たちは、「文明伝播的」事業を展開した。特に彼女たちが実施した近代的女子教育への着手が日本においては広く認知されている。

#### 4. YWCA の設立を支えた人々

1905年、日本にYWCAが設立されるに至ったのは、この在日婦人宣教師らによる世界YWCAへの熱心な働きかけがあったと言われている<sup>35</sup>。繊維工場で働く女工たちの実情を憂い、婦人宣教師会としてYWCAにその改善のための取り組みを訴えたのがきっかけとなり、世界YWCAは日本での発足を準備した。日本のYWCAの運営の責任を持つ初期中央委員会は以下の人々で構成された<sup>36</sup>。なお、生没年については、現段階すべて把握できていないた

め省略した。

委員長：ホイットマン (Miss M. A. Whitman) 東京駿河台女学校校長

会 計：エリス (Miss S. Ellis) フレンド校長

ウエスト (Miss A. B. West) ミッションナリー

委 員：ワイコフ (Miss H. J. Wyckoff)、ワージントン ( Miss H. J. Worthington)、

フィッシャー (Mrs. G. M. Fisher)、ヘルム ( Mrs. V. W. Helm)、

ソーパー ( Miss E. M. Soper)、フェリプス ( Mrs. G. S. Phelps)、

ハミルトン ( Miss L. Hamilton)、トリストラム (Miss A. K. Tristram)、

ザーフル (Miss L. Zurfluh)、花井夫人、平野はま、河井道子、津田梅子、

小崎千代 (弘道氏夫人)、佐藤錦子

萬国YWCA日本支部幹事 モリソン (Miss Theresa E. Morrison)

マクドナルド (Miss A. Caroline. Macdonald)

中央委員会の多くは宣教師やキリスト教界の指導者たちであり、婦人宣教師は日本YWCA設立の大きな役割を担っていたことが見えてくる。また日本人の委員たちは、婦人宣教師による教育や、欧米での教育機会を持った人々であった。この委員会は、世界YWCAから派遣された有給の職員（幹事）2名と、他は全てボランティア（無償）の委員で構成されていた。

19世紀アメリカにおける高等女子教育機関での女性の教育像は、教養ある良妻賢母と職業教師の育成であった。「女子教育は伝道の事業としてやや主旨から外れるという感覚があった<sup>37)</sup>」にも拘らず、アメリカ系プロテスタント・ミッションの婦人宣教師が普通一般女子教育に多大な努力を注いだのは、彼女等の多くはアメリカで学校の教員経験を持っていたことと、日本での受容が高く比較的安易に仕事に着手し、それを拡大発展できたからである。その背景には、近代的女子教育、女性像の創出まで手の回らない日本政府が、多くの場合、婦人宣教師の女子教育事業を支援したことと、婦人宣教師の学校に学んだ日本女性の大半は、士族、裕福な商家、裕福な農家といった「中流の上」の階層の出身者で、西欧文化の吸収と自己研鑽に積極的な真面目で教え易い少女たちであったという事がある<sup>38)</sup>。

そうした一群の中にYWCAの会員や職員となった女子青年の姿があった。YWCAに関わった女学生の多くは宣教師の学校に学んだ生徒であり、職員もそのほとんどがそうした学校の卒業生であったという事実がある。日本YWCA創立にあたり、世界YWCA総幹事は日本視察の調査報告を世界YWCAに提出しているが、そこに記述された内容の一つは、ミッションスクールの卒業生たちに対する働きかけの必要を説いたものであった<sup>39)</sup>。こうしたことの裏付けとなるのが、以下の表-1である。これは東京YWCAの職員の出身校を示したものである。時期的には多少ずれるが、職員の多くは宣教師の教育的影響を持つ学校の出身者であったことが読み取れる。

表-1：東京YWCAにおける邦人幹事出身校一覧

幹事出身身校	人数	出身学部学科	就任先
日本女子大学校	13名	社会事業学部（女工保全科、児童保全科）、家政学部、英文科	有職婦人部2.5労働部1家政部3英語部1家庭婦人部1実学部社会部4.5
女子英学塾	13名		英語部3体育部2商工部1学院庶務1商業部2少女部2家政部1語学部1
東京女子大学	17名	英語専攻部、大学部英語科、国語専攻部	体育部5キャンブ部2英語部4商業部3体育師範部2会員庶務1
神戸女学院	2名	大学部	少女部2
青山学院	2名	家政部、神学部女子部	食堂部1宗教事業部1
活水女学校	1名	専門部家政科	家政部1
明治学院	1名	神学部	宗教部1
宮城女学校	1名	音楽部	音楽部1
同志社女子専門学校	1名	英語	商業部1
日本体育会体操学校	1名	女子部	体育部1
日本女子体育専門学校	1名		体育部1
カリフォルニア大学	1名	体育専攻 *二世	体育部1
紐育ナショナル レクリエーションスクール	1名	*二世	体育部1
加洲大学	1名	*二世	家庭婦人部1
米国コロラド州実業学校	1名	*二世	国際友好部1

（東京YWCA機関紙『地の塩』No.1～No.113（1926年～1939年）より中本作成）

## 5. 日本のYWCAが継承したキリスト教文化

19世紀英米におけるリバイバルの高まりの中、奉仕する人として女性は社会的な位置を確保した。イギリスにおいてもアメリカにおいても女性に求められたのはキリスト教的な母性と家庭や社会に対する母性的な奉仕であった。滅私奉公とされる奉仕活動は、社会的な価値を持ち、女性自身を変化させる波及力を持っていた。日本のYWCAは、このキリスト教奉仕活動の文化をどのように受容したのであろうか。前節においては在日婦人宣教師が日本のYWCA設立に果たした役割を、YWCA会員や職員となる女性への教育的影響に、また設立への要請や設立時の委員としての働きに見た。また都市における若い女性は、男尊女卑的な社会状況の中ではあるが、以下のような環境を持つ者もいた。

- ① 日本近代化の中で女子教育の機会が生まれた。
- ② 婦人宣教師による教育活動に参加する（できる）層の少女及び女子青年がいた。
- ③ 宣教師による学校教育の中で西洋キリスト教文化に触れる機会があった。
- ④ 留学等により直接的な西洋キリスト教文化に触れる女性が表れていた。

こうした前提条件を経てきた女性たちを核として、YWCAは日本での運動を開始した。

日本YWCA初代総幹事キャロリン・マクドナルド（A. Caroline. Macdonald:1874-1931）は、

来日当時の日本の女学生たちの様子を以下のように話している。

来日当初、日本の実情理解のため自宅大広間を女子大生に寄宿舎として開放し7～8人の女学生が住むようになっていた。彼女らは学校の友人を誰彼となく寄宿舎に連れてくるが、互いに話しかけることをせず、ただ学科の勉強に専念するだけであった。また各女学校の集まりを行った時、彼女らは一室に多くの人が集まっても、ただ恥ずかしがり隅に4～5人同じ学校の者同士で固まり、そこで小声で話し合うばかりであった。女性同士であっても、その交わり、社会性というものが全く閉ざされており、学生たちを交わりと協力的な働きに導くためには、まずその固い扉を開かせることから始めねばならなかった<sup>40</sup>。

日本YWCA機関誌『明治の女子』創刊号の開書に、幹事テリーザ・イー・モリソン (Miss Theresa E Morrison)<sup>41</sup>は、「理想の婦女」また「女子青年会の理想婦人たる特質」を、健康で活動的であり、人として互いに必要とされ助け合い、社会に目を向け、良い学びに努め、得た知識を活用できる人でありたいと述べている。ここには当時のキリスト教社会の中で理想とされた女性像が語られている。婦人宣教師には異教徒の女性の地位をクリスチャンの女性が保持する地位にまで高めるといった目的意識が与えられていたが、そのことも相通ずる理想がYWCA幹事の中にあった。マクドナルドが見た日本の女子学生たちの姿は、その理想とは程遠いものであった。日本YWCAは、ミッションスクールにすでにあったキリスト教グループを、若い女性のためのキリスト教運動として、連携・統合するよう働きかけ、学校YWCAとしての活動が形成された。翌年には第1回学生夏期修養会を開催（28校165余名の参加者）し、キリスト教による精神的成長の場を設けている。続いて、日本のYWCAはミッションスクール卒業生などの家庭婦人を会員として組織していった。

YWCAは自覚ある会員によって運営される会員組織であり、その会員と専門性を持つ職員が両輪となり共に働き奉仕する団体だと言われる。会員の力は「委員会」や「クラブ」の実践を重ねる中で培われていく。日本のYWCAはその設立時に組織運営母体として会員と職員（幹事）からなる中央委員会を結成しているが、この委員会という民主的な協議から物事が始まり進むという組織の運営方法が、硬い扉の中にある日本の女学生をYWCAが描く理想の女性像へ近付ける具体的な方法であったと考えられる。

ここでは「クラブ」や「グループ」といわれたYWCAの第一歩的な少人数の集団活動の実態にその実例を見る。

表-2:若い働く女性のクラブの活動状況定期集会（毎週木曜日）

5:30～6:30	マスシンキング
6:30～7:30	(第1・第3) 礼拝及聖書研究 (第2) 各クラブ礼拝及プログラム *10～12月社会思想史研究 (第4) 礼拝・趣味のグループ (第5) 礼拝・クラブ研究又はレクリエーション
7:30～	(第1) 各クラブ議事 (第3) 各クラブプログラム 講演

(東京YWCA機関誌『地の塩』第93号(1937.2.11) p.19より中本作成)

こうした事例からもYWCAに関わった女学生、会員、職員の多くは、宣教師たちが実施した女子教育に影響を受けた者たちであったと考えられる。キリスト者ではない日本の女性たちが学び、日本におけるYWCAの担い手として位置づいていったのである。毎週木曜日がクラブの活動日であり、クラブは全体のマスシンキング<sup>42</sup>から始まる。その後キリスト教の礼拝を行い、学びやレクリエーション等、全クラブと各クラブのプログラムが、週毎に決められたスケジュールで組み合わせられ実施される。こうしたクラブの運営は、クラブ員から選出された委員によって推進され、各クラブ会議と全クラブ会議とによって組織的な運営がなされていたことがわかる。クラブ員は定期的な集会や年間活動等の日常活動を通してクラブ員同士の関係性を深め仲間となって行く。そうした人間関係はクラブ全体、YWCA全体までも及び、YWCAの仲間としての関係性は深まり、広がる様がプログラムの実情から十分に推察できる。こうして彼女たちは自他共にYWCAの会員という認識を共有し、自己を高め、集団としての質を高めていったと言えよう<sup>43</sup>。

## 5. 小括

以上述べてきたように、YWCAを受容する背景としては、第1に、婦人宣教師によって実施された女子教育が、キリスト教国でない日本の女性たちの中に、西洋キリスト教文化受容の土壌を整え、第2に、そうした中で育てられた女子青年たちの中から、YWCAの担い手である日本人幹事（職員）が育成され、そして第3に、クラブなどを用いた一般の女子青年に対する働きかけがあったと言えよう。特に、小さな集団の中でお互いの存在を認め合い協力し合い、目標や課題に向かって働くことを経験する「クラブ」は、個々のクラブ員の自治的思考力や行動力を培い、限られた環境で暮らす彼女たちの視野を拡げ、他者との関係や思考する力を育くむ社会教育的実践である。実践経験の蓄積は、女子青年たちの全人格へ影響を与え、個の確立、精神の自律への道筋をつけることとなる。クラブの中で経験した自治的活動は、一人のクラブ員をYWCA組織の運営の役割を担う委員として成長させていく。

前述の女子学生はこうした実践を積み重ねることによって、心の扉を開いていくのである。YWCA組織運営の役割を持つ「委員会」は、その活動を通じて委員の成長を更に促していく。こうして一人の女性が自律的な「会員」へと育てられ、自律的会員によってYWCA運動が継続されていくのである。こうした社会教育的実践には、専門職としての職員のその場に応じた働きが重要であることは明らかなことであり、会員と職員との連携の中でYWCA運動が成立してきたのであった。

組織はその組織を形成してきた文化を持つ。YWCAは19世紀西洋キリスト教社会において形成されたキリスト教的な奉仕活動文化を持ち続けてきた。その文化は日常の活動の実践を通し、そこで育つ自律的な会員により継承されてきた。多くは非キリスト者である一般の女子青年たちが、そうした役割を担ってきた。YWCAがキリスト者だけではなく、より広い女性たちに受け入れられた背景の一つには、キリスト教的な奉仕活動の実践により、そこで実施されるヒューマニズム的な活動を支持する女性たちが存在していたことがある。奉仕活動の先には、工場で働く女工や、生活に追われる母たちが居る。そうした人をも巻き込む活動は、YWCAに関わる人の裾野を広げることになった。

キリスト教的奉仕活動には様々な背景があり、それに左右される形態もあるが、無償の奉仕と専門的な見識が、人間を尊重する視点に焦点を当て働くならば、そこにはその社会を構成する人々にとって普遍的な価値が生まれ、支持され継承される文化として存在していくのではないだろうか。

では普遍的な価値とはいかなるものか、YWCAの具体的な活動を分析することで、その本質に迫ることが次の課題である。

---

<sup>1</sup> Anna Virena Rice “A History Of The World’s Young Women’s Christian Association” Literary Licensing, 1947年, LLC(2012/9/8).

<sup>2</sup> 同上、Introduction – pp. 1-5.

<sup>3</sup> 武田清子「解説・総目次・索引 解説－日本YWCAの使命と特質」日本YWCA『復刻版女子青年界』別冊、不二出版、1994年、p. 5。

<sup>4</sup> 福音主義 (evangelicalism) とは、「聖書の伝える福音に信仰の中心を置く立場」(大辞林第三版)で、「プロテスタントの思想的支柱」(デジタル大辞泉)と一般に記されている。

<sup>5</sup> 日本YWCA80年史編纂委員会編『水を風を光を 日本YWCA80年1905 – 1985』

日本YWCA、1987年、p. 13 には以下のように記されている。

「19世紀はまた、キリスト教に立つと否とを問わず、博愛主義、人道主義の運動の世紀でもあった。奴隷制度撤廃運動、セツルメント活動、白い奴隷(強制売春)取り締まりなど地道な社会活動が根付いたのがこの時代である。」



<sup>6</sup> Woman's Foreign Missionary Society は、「婦人外国伝道協会」「婦人外国宣教協会」とも訳されている。

<sup>7</sup> 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師 来日の背景とその影響』東京大学出版会、1992年、p.3。

<sup>8</sup> エキュメニズム (Ecumenism) とは、教会合同運動、世界教会運動とも訳される。

<sup>9</sup> 大貫隆他編『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002年。

<sup>10</sup> 外村民彦『キリスト教を知る事典』教文館、1996年、p. 353。

<sup>11</sup> Justo L Gonzalez 石田学 / 岩橋恒久訳 原題 "The Story of Christianity" 『キリスト教史 下巻 宗教改革から現代まで』新教出版、2003年、p.241。

<sup>12</sup> 前掲、小檜山ルイ、pp.17-18。

<sup>13</sup> ウィリントン・ウォーカー (Williston Walker) 監修：竹内寛・訳：野呂義男他  
キリスト教史4『近現代のキリスト教』ヨルダン社、1986年。

<sup>14</sup> 同上、pp.122-128。

<sup>15</sup> 石原謙『キリスト教の展開—ヨーロッパ・キリスト教史 下巻—』岩波書店、1972年、p.14。

<sup>16</sup> 前掲、ウィリントン・ウォーカー、pp.257-271。

彼はエキュメニカル運動を「教会再一致を目指す運動と方向性のすべてを包括的に言い表した総称的名称」と定義している。

<sup>17</sup> 前掲、石原謙、pp.610-611。

<sup>18</sup> 前掲、ウィリントン・ウォーカー、p.257。

<sup>19</sup> 河村貞枝 / 今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』青木書店、2006年、pp.207-208。

<sup>20</sup> 金澤は著書『チャリティとイギリス近代』（京都大学学術出版会、2008年）において、18世紀半ば以降19世紀を通じて、英国では空前の規模で慈善・博愛活動がなされ、さまざまな救済が存在し、当時の英国では、こうした活動全般を、通例、公的な救済行政と区別して、チャリティ (charity 慈善) ないし、より包括的にフィランソロピ (philanthropy 博愛活動) という言葉で表現していたことを示し、チャリティないしフィランソロピを、「民間非営利の自発的な弱者救済行為」と広く定義し、歴史的 position 付けと共にデータに基づく詳細な研究を展開している。イギリスにおけるチャリティは、女性に限られる行為ではないことは言うまでもないが、本論では女性による慈善、非営利的な善行とされる無償の働きの存在を確認することを目的している。

<sup>21</sup> エレン・キャロル・デュボイス (Ellen Carol DuBois) / リン・デュメニル (Lynn Dumenil 訳：石井紀子他 世界歴史叢書『女性の目から見たアメリカ史』明石書店、2009年。

<sup>22</sup> 同上、p.180。

<sup>23</sup> 同上、p.183。

<sup>24</sup> 前掲、小檜山ルイ、p.5。

<sup>25</sup> 同前、p.20。

<sup>26</sup> 同前、p.19-20 参照。

- <sup>27</sup> 文部科学省ホームページ <http://www.mext.go.jp> 2015.2.2 「学制百年史 / 教学聖旨の起草」
- <sup>28</sup> 同上、「学制百年史 / 六 教学聖旨と文教政策の変化」
- <sup>29</sup> 生活科学調査会編『講座・日本の社会教育第IV巻婦人教育』医歯薬出版、1960年、pp.6-7。
- <sup>30</sup> 土方苑子編『各種学校の歴史的研究 明治東京・私立学校の原風景』東京大学出版会、2008年、p.10。
- <sup>31</sup> 阿部義宗編『日本におけるキリスト教学校教育の現状』基督教学校教育同盟、1961年、pp.5-8、pp.119-120。
- <sup>32</sup> 1832年伊勢鳥羽港を出帆した宝順丸が遠州灘で難破。14か月後米国ワシントン州フラッター岬に漂着。助かった岩吉、久吉、音吉はハドソン汽船会社の船長に救出されロンドンに移動。その後3人はマカオで日本語訳聖書の翻訳に関わり『ヨハネ福音の傳』『ヨハネ上中下書』を完成。1837年宣教師、医師等の他に3人を含めた7名の日本人漂流民を乗せたモリソン号が鹿児島、浦和に到着。異国船打払令による砲撃で入国できず、この事件が米国政府に報告された。その後『モリソン号の日本来航記』として出版されたこともありアメリカで世論を沸かせ、ペリー来航の先駆けとなったと言われる事件。
- <sup>33</sup> 中島浩二「「改革・長老教会」キリスト教史学会編『宣教師と日本人—明治キリスト教史における需要と変容』教文館、2012年、pp.140-142参照。
- <sup>34</sup> 小檜山ルイ「婦人宣教師の女子教育事業」キリスト教史学会『キリスト教史学 第48集』キリスト教史学会、1994年、pp.72-77参照。
- <sup>35</sup> 前掲、日本YWCA80年史編纂委員会、pp.23-24。
- <sup>36</sup> 日本基督教女子青年会機関誌『明治の女子』1904年第1巻8号p.1（日本YWCA『女子青年界』復刻版1992年不二出版）及び石橋宮子編纂『東京YWCA年表』1972年東京YWCA p.6の記載事項を参照した。本年表は、東京YWCA70周年を前に、「特に戦時中のありようをまちがいなくまとめておこう」ということから作業が行われたもので、元職員の石橋宮子が1972年までの歴史を編修した。その後、80周年の歴史年表作成に役立てた事、その後の1973年から1985年までを元職員の梶美津保が追記した事が前書きに記されている。現在は東京YWCA内に保管されている。
- <sup>37</sup> 前掲、小檜山ルイ、p.73。
- <sup>38</sup> 同前、p.267。
- <sup>39</sup> 前掲、日本YWCA80年史編纂委員会、pp.22-23。
- <sup>40</sup> 日本基督教女子青年会機関誌『女子青年界』第22巻10号「創立の頃を想ひ出でて」1925年（日本YWCA『女子青年界』復刻版、不二出版、1993年）
- <sup>41</sup> 最初の外人幹事として日本YWCA創立を援助する為来朝。カリフォルニア、オレゴン、ワシントン3州YWCAの支援による。米人。日本YWCA創立委員会の指導の下に、日本語の習得に努めると共に、聖書の組を開きなどして、女学生に近づく努力をした。一方小雑誌『明治の女子』（Young Women of Japan）の刊行を企てた。健康の理由で1905年12月帰国。（職員記録版『東

京 YWCA 年表』より抜粋)

<sup>42</sup> 内容は不明だが、mass thinking の解釈からすれば全体会と言えよう。

<sup>43</sup> 中本かほる「戦前の東京 YWCA 有職婦人部による女子青年教育」『日本社会教育学会紀要 No.49-2』2013 年、p.38。

## **Consideration of How and Why was The YWCA Movement Accepted in Japan**

NAKAMOTO, Kahoru

The 19<sup>th</sup> century revivals of religion at Britain and America was also active over social activities as evangelism expanded with it. It was “women” of Protestant Churches who canalized their energies into evangelism and charity work. Such kind of charity work made them face society with more awareness and vitality which led them to find some organizations. Through such contexts, YWCA (Young Women’s Christian Association) was found. There are mainly three elements that the women worked on in order to achieve the acceptance of YWCA in Japan. They are activities for women education, petition for the foundation of YWCA and their dedication to YWCA as members its steering committee. The Christian dedication style that women in western Christian churches cultivated has been practiced and recognized in western areas. This experience is one of the basics of the Japanese YWCA movement.

キーワード：「YWCA」「volunteer」「young women」